



Title	巻頭言：10周年記念号（第10号）の発刊に寄せて
Author(s)	中島，和子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2014, 10, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57932
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

巻頭言 10周年記念号（第10号）の発刊に寄せて

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会は、2004年から紀要の発行を始め、今年10年目という節目を迎えました。これを記念して『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究10周年記念号』をお手元にお届けできることは、誠にうれしい限りです。ご覧の通り、これまでの紀要の中でもっともページ数が多く、来し方を振り返り、これからの10年を展望する記念号にふさわしく、質量ともに充実した内容になっています。

本稿の目的の1つは、昨年夏に大阪大学で開催された MHB 研究会10周年記念大会（真嶋潤子大会企画運営委員長報告pp.137-139）の大綱を文書にして後世に残すことです。冒頭の《パネルセッション》と《講演録》がそれぞれです。

《パネルセッション》「母語・継承語・バイリンガル教育研究の軌跡と展望」は、MHB 研究会の主要活動領域を、「海外継承日本語教育」、「バイリンガルろう教育」、「国内 CLD 児（外国人児童生徒）の言語教育」、「インターナショナルスクールにおける多言語教育」、「（国内日本人児童生徒の）バイリンガル育成にむけての萌芽的試み」の6つに分けて、担当理事が書き下ろしたものです。最終ページに過去10年間の MHB 紀要掲載論文45本の分類リスト（pp.44-45）がありますが、明らかに上記の6領域には格差があります。既存共有知識が豊富な領域と現在新しく開拓されつつある領域です。このため、論文の内容も書き方も領域によって異なりますが、MHB 研究会が過去10年間、「マルチリテラル育成」という標語のもと、国内・国外を問わず、未踏の領域も含めて、幅広く挑戦してきた姿の証とも言えるでしょう。

《講演録》は、記念大会のハイライトであった基調講演2つです。第1は、教育社会学で著名な大阪大学志水宏吉教授による「外国にルーツをもつこどもたちのために学校・教師ができること」で、外国人児童生徒を含めて、日本の学校教育が今後どうあるべきかについて考える上で多くの示唆に富むものです。第2の文科省国際教育課の神代浩課長の「「国際教育」と言語教育」は、教科学習の中に埋め込まれた「国際教育」を中心に据えて、それを支える各種言語教育について文科省の施策方針を統括的に示したものです。「マルチリテラル育成」の実現には強力な国の言語政策が必要不可欠であるため、当然多くの MHB 会員が関心を寄せるテーマであり、「継承語教育」が国の施策の中で初

めて国際教育課課長によって語られ、位置づけられたことに勇気をもらう会員も多いことでしょう。「継承語教育」が日本語教育学会で初めてテーマとして取り上げられたのが1988年、26年の長い闘いだったことを思うと感慨無量です。

《研究論文》3点は、英語と日本語、ドイツ語と日本語のように言語差のある2言語の組み合わせによるバイリテラシー獲得をテーマにしたものです。研究の対象も方法も異なりますが、「マルチリテラル育成」という未開拓の領域が必要としているのは、まさに以下のような、データに基づく実証的研究です。

研究論文①の「海外在住小中学生の日英作文力」は、海外週末教育機関である補習授業校に通級して、ほぼ英語と互角のレベルの継承日本語を伸ばそうという教育的取り組みの中で行われた横断的研究です。年少者の作文力ですから、環境要因・個人要因が大きく関わるなか、個人3大要因である「年齢」「滞在年数」「入国年齢」との関係で2言語の作文力の相互依存関係を捉えようとしたところに、継承語研究のあり方の特徴の一端が窺えます。研究論文②の「同時バイリンガル幼児の萌芽的読み書き行動の形成過程」は、3-5歳の長期にわたる縦断的なケーススタディーで、国際結婚家庭の1男児を対象に、社会文化論の枠組の中で母親の観察による日誌法を用いて、ドイツ語と日本語の萌芽的読み書き行動を跡づけたものです。家庭内での親子・姉弟・祖父母との関係、幼稚園の年長児との関係など、継承語研究には欠かせない主要環境要因との関係が明るみに出され、極めて興味深く、示唆に富むものです。研究論文③の「バイリンガル環境にある幼児の文字概念認知と受容語彙の発達調査」は、国内の幼児教育の場で「外国語としての英語」を使用することが、リテラシー獲得の基礎となる4-5歳児の音韻認識や文字認識にどのような影響を与えるかについて、心理言語学的手法を用いて調べたものです。英語教育の低年齢化に歯止めがかからない現在、関係者の多くの疑問に答えようとしたものと言えます。

これからの10年、母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会が本記念号のパネルセッション、講演録、研究論文を踏み台として大きく発展し、新しい会長のもとさらなる実証的研究、実践活動が活発に行われることを願ってやみません。

母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会 会長

中島 和子

2014年3月